

**薬学部・薬学系研究科**

I	研究の水準	.....	研究 10-2
II	質の向上度	.....	研究 10-4

## I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 分析項目 I 研究活動の状況

#### 〔判定〕 期待される水準を上回る

#### 〔判断理由〕

観点 1-1 「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第 2 期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）における著書、研究論文の発表数は、国内外合わせて平均 390 件で、教員一人当たりの研究出版物の件数は年度平均 6 件となっている。
- 第 2 期中期目標期間における特許出願数は平均 20 件で、そのうち承認されたものは平均 12 件となっている。
- 第 2 期中期目標期間における受託研究の受入数は平均 30 件、共同研究の受入数は平均 60 件となっている。
- 第 2 期中期目標期間における科学研究費助成事業の採択率は 39.7%で、科学研究費助成事業を含めた外部資金の総額は平均 28 億円を超えている。また、教員一人当たりの外部資金獲得額は年度平均 2,340 万円となっている。
- 平成 25 年度の文部科学省先端研究基盤共用・プラットフォーム形成事業に採択された、「最先端創薬基盤のワンストップ共用による産学連携創薬推進事業」によりワンストップ創薬共用ファシリティセンターを設置し、汎用性の高い共用機器を集中的に配備し、研究を効率的に遂行するための基盤を整備したことで、学外研究者や異分野の研究者等が共用機器を利用する機会が増え、研究の効率化、高度化に寄与している。

以上の状況等及び薬学部・薬学系研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

## 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

### 〔判定〕 期待される水準を上回る

#### 〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に生物分子化学、ケミカルバイオロジー、分子生物学、構造生物化学、生物物理学、化学系薬学、物理系薬学、生物系薬学、薬理系薬学、環境・衛生系薬学、医療系薬学の細目において卓越した研究成果がある。また、紫綬褒章の受章や日本薬学会賞の受賞をはじめ、研究科全体で32件の受賞等がある。
- 卓越した研究業績として、構造生物化学の「医学薬学的に重要なタンパク質の構造生物学的研究」、生物系薬学の「細胞ストレス応答機構の研究」、薬理系薬学の「細胞のシグナル伝達機構に関わる研究」等、11細目で14件の業績がある。特に「細胞ストレス応答機構の研究」は、ストレスシグナル分子機構の解明等の業績により、平成25年度に持田記念学術賞、平成27年度に高峰記念第一三共賞を受賞している。
- 社会、経済、文化面では、特にケミカルバイオロジーの細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、ケミカルバイオロジーの「蛍光プローブ開発研究」があり、がんという社会の関心の高い疾患に関する成果は、国内外のニュース番組や科学番組で取り上げられている。

以上の状況等及び薬学部・薬学系研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、薬学部・薬学系研究科の専任教員数は72名、提出された研究業績数は19件となっている。

学術面では、提出された研究業績19件（延べ38件）について判定した結果、「SS」は9割、「S」は1割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績2件（延べ4件）について判定した結果、「SS」は3割、「S」は5割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## II 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 受託研究と共同研究の受入数について平成 22 年度と平成 27 年度を比較すると、受託研究は 23 件から 43 件へ、共同研究は 67 件から 70 件へそれぞれ増加しており、第 2 期中期目標期間の外部資金の総額は、年度平均 28 億 5,500 万円となっている。
- 育薬学寄付講座、医薬政策学寄付講座及びファーマコビジネス・イノベーション寄付講座の社会薬学系の 3 講座に加えて、医薬品評価科学講座を開設し、寄付講座との連携を行っているほか、平成 24 年度に疾患の基礎的な細胞機能を研究する疾患細胞生物学寄付講座を開設している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 教室主宰者の年別論文被引用回数は、第 1 期中期目標期間（平成 16 年度から平成 21 年度）の平均 437 回から第 2 期中期目標期間の平均 529 回へ増加している。
- 紫綬褒章の受章や日本薬学会賞の受賞をはじめ、第 2 期中期目標期間に研究科全体で 32 件の学会賞等を受賞している。また、平成 27 年度において、論文の年間被引用回数が 1,000 回を超える研究者は 4 名となっている。
- 国外の学術雑誌に発表した論文や総説について平成 22 年度と平成 27 年度を比較すると、インパクトファクターが 5 以上の学術誌への掲載数は 76 件から 111 件へ、社会的に影響力の高い商業誌への掲載数は 9 件から 20 件へそれぞれ増加している。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

### 2. 注目すべき質の向上

- 紫綬褒章の受章や日本薬学会賞の受賞をはじめ、第 2 期中期目標期間に研究科全体で 32 件の学会賞等を受賞している。また、平成 27 年度において、論文の年間被引用回数が 1,000 回を超える研究者は 4 名となっている。